

「命の水の泉」

聖書には「水」が実にたくさん出てきます。詩人は「命の泉はあなたにあり／あなたの光に、わたしたちは光を見る」(詩編 36:10)と歌い、神の下にある命の泉に思いを馳せます。また、有名な詩編 23 編にも「憩いの汀に伴われる」(詩編 23:2、協会共同訳)とあるように、水辺に導かれることはすなわち救いと密接につながっています。それはきっと、聖書の世界が「荒野」と切っても切り離せないからでしょう。エジプトで奴隷のように働かされていたイスラエルの民はモーセの導きの下、カナン之地へと旅立ちました。その間、何度も空腹とどのの渴きを覚えて神に懇願します。神はその度に食べ物、水を与えられました(「あなたはその岩を打て。そこから水が出て、民は飲むことができる。」出エジプト記 17:6)。時には願っても叶えられないこともあったに違いありません。それほど人々は水を渴望していました。

一方、私たちの日常には水が溢れています。むしろ水害など、水に困っていると言っても良いかもしれません。そのような現代の生活ではなかなか、水を渴望することはないように思います。その意味で、私たちは聖書の民が水を渴望するように神を渴望する感覚を学ばなければならないのでしょうか。

イスラエルが大国の思惑に翻弄されていた頃、預言者イザヤは「まことに、主は我らを正しく裁かれる方。主は我らに法を与えられる方。主は我らの王となって、我らを救われる」(イザヤ書 33:22)と、神が直接人々を導く日が来ることを預言します。今は雌伏の時と言わんばかりです。「その日」が来ることを待ち望むようにと人々に呼びかけました。もっとも、当時の人々は現実に翻弄されてなかなか待つことができません。それゆえ、神がこの約束を果たすべくイエスを与えられた時でさえ、救い主の誕生を信じることができませんでした。ずっと渴きを覚え続けたままだったのです。

イエスが天に昇られた後の弟子たちもまた、現実に翻弄されていました。ローマの弾圧は激しく、信仰を保つだけで精一杯。自ら離脱する者さえ現れるようになっていました。ヨハネの黙示録はそのような彼らに、「玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、／命の水の泉へ導き、／神が彼らの目から涙をことごとく／ぬぐわれるからである」(ヨハネの黙示録 7:17)と完全な救いが待っていることを約束します。今感じている渴きは必ず癒されるからと、「その日」が来るまで待ち続けるように呼びかけます(「目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」マタイによる福音書 25:13)。

私たちの現実をイザヤの時代、イエスの時代と比較した時、「信仰を保つ」困難さを感じることは少ないでしょう。しかし、生きることの困難さは何ら変わりません。日々の生活にあえぎながら、私たちもまた「命の水の泉」を求めています。

『いのちの水』という寓話があります。カナダの神学者トム・ハーパーの著作「For Christ's Sake」(「どうかお願いだから」の意)の序文に収録されています。

「その水を飲むと体も心もいやされ、希望と勇気がふたたび強められたのだ。人々は生きることに新鮮な意味と豊かさを発見した。……巡礼者たちはこの泉を『生ける水が溢れる場所』と名づけ、この水を『いのちの水』と呼んだ。」こんな水を飲みたいと思います。神の救いが語られる教会がこの「いのちの水」で溢れるところとなってほしいと願います。

しかし、この寓話は「いのちの水」の素晴らしさを語った後で、「いのちの水」を人間が己の欲で独占したり囲い込んだりする様子を描き出します。そして、本当の「いのちの水」は失われつつあるのではないかと警告するのです。

訳者の中村吉基は「訳者あとがき」を、「この小さな絵本が、信仰、思想、性別、人種、年齢、価値観、経歴などを超えて一人でも多くの人に読まれることを心から願っています。そしてあらゆる『壁』を打ち壊し、『いのちの水』を自身の手で得る働きを、『今、ここ』からご一緒に始めて行けるなら、きっと素晴らしい世界が実現することでしょう」と締めています。

私たちの教会もまたこの世界に開かれた場所として、集まりとしてこれからもあり続けたいと願います。集う者一人ひとりが「体も心もいやされ、希望と勇気がふたたび強められ」る恵みを分かち合う、「命の水の泉」であり続けたいのです。

